

ICT 部会

部会長：附属中学校 渡邊光輝

部会員：附属中学校 藤倉遼介

附属高等学校 植田敦子・玉谷直子・山上通恵

2023 年度活動報告：

本部会は、教育現場における情報通信技術（ICT）の活用促進とその効果的な統合に注力し、本年度も教育の質の向上と効率化を目指し、多岐にわたる取り組みを展開しました。特に、教育界で急速に注目を集めている生成 AI 技術と校務のデジタルトランスフォーメーション（DX）に焦点を当て、革新的な教育手法の探求と実践に力を入れて参りました。

生成 AI の教育活用についての検討

本年度において、生成 AI 技術、特に ChatGPT のような進化した AI が教育分野でどのように活用され得るかについて、中学校及び高等学校の教員を中心に幅広い議論が展開されました。教育現場における AI の利用が拡大する中、特に国語科では創造的な文章作成や AI に関する批判的な意見文の作成を通じて、生徒たちの批判的思考能力と表現力の向上が図られました。また、社会科では AI を用いて歴史的、社会的な現象を深く分析する活動が行われ、生徒たちは多角的な視点からの理解を深める機会を得ました。情報科では AI の倫理に至るまで、幅広いカリキュラムが展開され、生徒たちは現代社会を生き抜くための重要なスキルを身につけました。

これらのセッションで共有された各教科での AI 活用事例は、教育現場における AI の活用がもたらす多大なメリットと、それに伴う課題についての深い洞察を提供しました。例えば、AI を活用することで個々の生徒の理解度に応じたカスタマイズされた学習が可能となり、一方で、AI の判断基準やプライバシーの保護に関する課題も浮き彫りになりました。

さらに、AI を活用した授業の効果についても詳細な検証が行われました。AI を取り入れた授業では、生徒たちが自らの学習プロセスにより積極的に関与し、学習内容に対する好奇心や探求心が顕著に刺激されることが確認されました。また、教員にとっては、AI を授業に取り入れることで、従来の指導方法に再考を迫られると同時に、より創造的で効果的な教育手法へと移行する契機となりました。具体的には、生徒たちが AI を利用して生成した内容を批評するプロセスでは、批判的思考や論理的な議論の構築といった高度なスキルが要求され、教員はこれらのスキルを育成するための新たなアプローチを模索する必要に

迫られました。

これらの議論を通じて、AI の教育現場への統合は単に新しい技術を導入すること以上の意味を持ち、教育の質の向上、生徒と教員の関係性の再定義、そして教育の未来像の再構築に寄与する可能性があることが明らかになりました。

高校生を対象とした特別講演会の実施

技術進化の速度とその教育への応用の重要性を、より多くの生徒に理解してもらうことを目的として、附属高校では茂木健一郎氏を招聘し、高校生向けの特別講演会を開催したのでそれを連携研部会メンバーが聴講しました。この講演では、AI 技術の基本原則から、それが社会や個人の学習に与える影響に至るまで、幅広いトピックが取り上げられました。生徒たちは、将来彼らが直面するであろうデジタル社会における様々な可能性と課題について、深く考える機会を得ました。

講演後の Q&A セッションでは、生徒たちからの鋭い質問が相次ぎ、生成 AI の倫理的側面や、AI と人間の関係についての議論が活発に行われました。これにより、生徒たちはテクノロジーの進化をただ受け入れるのではなく、批判的に考察し、賢明に活用することの重要性を学びました。

校務 DX の推進に向けた取り組み

教育現場のデジタルトランスフォーメーションを加速させるため、本部会では校務 DX に関する一連の取り組みを行いました。既にデジタル化を進めている中学校の事例を共有し、BYOD 導入後のネットワークセキュリティ強化、教育用アプリケーションの選定、デジタル教材の活用方法など、実践的な知見が交換されました。

また、ペーパーレス化を推進するための戦略や、教育クラウドソフトの導入、デジタル採点システムの導入に向けた具体的な検討も行われ、教育現場における業務効率化と教育の質の向上に向けた具体策が模索されました。このプロセスにおいて、附属中学校教育 DX アドバイザーである井上勝先生からの専門的な助言が、参加者に新たな視点を提供しました。

総括

本年度の活動を通じて、本部会は教育の ICT 化とデジタルトランスフォーメーションを推進するための実践的な取り組みを深め、教育現場の変革をリードするための基盤を強化しました。生成 AI の教育への応用から校務 DX の推進に至るまで、本部会は教育界全体が直面する課題への解決策を模索し、共有することで、教育の質の向上と効率化を目指してまいります。来年度も、教育技術の進化に即応し、教育現場でのその有効活用を探求するための取り組みを継続して参ります。